

元禄・宝永・安政地震と富士山宝永噴火

静岡県立中央図書館 歴史文化情報センター

1 元禄大地震

- ▶ 元禄16(1703)年11月23日 江戸・関東周辺で被害
推定M7.9～8.2 大地震、相模・武藏・上総・安房は震度6
- ▶ 小田原城下は全滅、潰れた家屋8千、死者2千3百人を出す
- ▶ 津波の被害は、千葉県銚子市から静岡県下田市まで及ぶ
- ▶ 静岡県内 特に東部地区で津波による甚大な被害を出す

津波死者供養塔・伊東市内に3基(次頁スライドNo.3・4)が残る
No.3 日蓮宗 行蓮寺 (伊東市宇佐美)
No.4 日蓮宗 仏現寺 (伊東市物見ヶ丘)

- ▶ 同年12月晦日から翌年正月2日・3日まで富士山の山鳴り(地鳴り)
→ 噴火の前兆現象 → 宝永地震・富士山宝永噴火へつながる

津波被災者供養塔 (伊東市行蓮寺所蔵)

伊東市宇佐美では、380人の津波による溺死者があったと刻んでいる。元禄地震発生60年後の1762(宝暦12)年に建立された供養塔である。



元禄地震津波供養塔 (伊東市仏現寺所蔵)

右の2基が元禄地震津波供養塔。左は関東大震災供養塔。元禄地震の津波は午前2時ころに発生したこともあるって、大きな被害を出した。



2 宝永地震と宝永噴火

宝永4(1707)年10月4日 東海・東南海・南海の三連動地震起る
地震の規模は M8.4と推定され、地震に伴う津波による被害が
静岡県内でも出る → 西部地区 新居宿・白須加宿・舞阪宿など

◎「浜名湖北岸を襲った津波の図」

歴史文化情報センター 家番号73024
『静岡県史別編2 自然災害誌口絵4』

◎宝永4(1707)年11月23日 富士山噴火(宝永地震と連動)

→ 当日の様子が描かれた資料 『富士山宝永噴火絵図』

「昼乃景氣」・「夜乃景氣」・「焼納リ乃景氣」

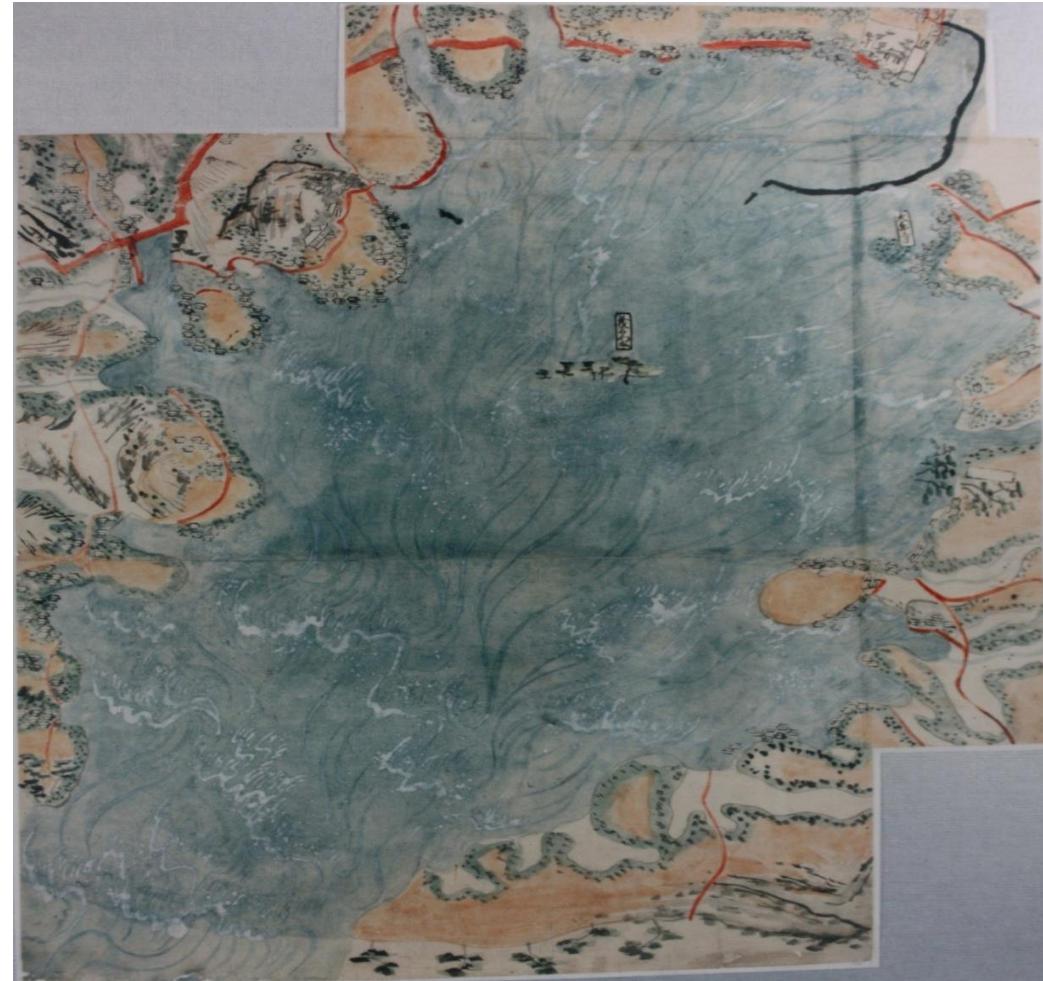
歴史文化情報センター 家番号03036 資料番号P41-01

(資料所蔵者等の個人情報はご本人の希望により公開せず)

浜名湖沿岸を襲った 津波の図

(内山家所蔵)

宝永地震による津波は浜名湖北岸にもおしよせ、細江河畔の田畠は沈下し海水に浸かってしまった。気賀の近藤用清は、20年の歳月をかけてこの采地を復興した。



葛飾北斎
宝永山出現

押しつぶされた家、逃げ惑う人々、材木の下敷きになった馬、桶や甕などとともに人も宙をまっている。富士山宝永噴火の迫力が伝わってくる。

静岡県立中央図書館所蔵



富士山宝永噴火・葛飾北斎「宝永山出現」

宝永4年(1707)11月23日、駿河国印野村(現小山町)付近から噴火した「富士山宝永噴火」の惨状が描かれている。

最初の噴火で軽石が噴出し、いったん収束したあと再開し、火柱が上がり火山弾や黒色スコリアが噴出した。噴火は断続的に16日間続き、約100km離れた江戸でも噴火初日の午後から噴煙に覆われ、細かい灰色の火山灰が降下した。

噴煙前の宝永地震と合わせて死者約2万人とされているが、泥流洪水の被害も合わせるとさらに多くの被害者を出した。

富士山噴火絵図 昼乃景氣

東海道原宿の書役は富士山宝永噴火の様子を丹念に記録し
「昼乃景氣」では、噴火当初の様子が描かれている。



「昼乃景氣」

絵図に書かれている文字

(昼乃景氣)

宝永四年丁亥(ひのとい)十一月廿
三日、午(うま)ノ上刻ニ地震ヨリ、
富士山雷の如クナリ、焼出ル事
如斯、右廿二日ヨリ十二月八日
迄十六日之間燒候、昼乃躰如此
此所江燒雲ノ内ヨリ石砂下ルコト

大星の如シ

積りて宝永山ト成ル

但し十一月廿三日斗(ばか)リ
見ル

『富士本宮浅間社記』

「宝永四年富士山噴火之記」

富士南面の空まで燐々覆(あいたいおおひ)、殊に富士山振動する事頻なり

諸人怪望の事故□転し、是は富士山今般崩れ傾落はと 山下之□家主は奉公人男女暇を遣し、牛馬を放ち追□家財を捨て他郡へ□たるものあり魂を冷し忙然と□東西南北に周章呼ぶ声哀れなり、怪むも道理也

此村里上へ、空まで雲の如くのもの靡き覆ひきたり、万一大地へ崩れ落ちる時は、人々悉に死すべしとなん他国はしらす、此里は天地も崩るる事かと悲し

□は欠字

『富士本宮浅間社記』 「宝永四年富士山噴火之記」 現代語訳

富士山噴火の噴煙は時間とともに大きくなり、富士山南面の空を一面に暗くたてこめるだけでなく富士山を震源とする地震も激しく、富士山が傾落するのではないかと心配し、山麓の豪農たちの中には奉公人に暇を出し、また牛馬を放ち、家財を捨てて安全な他郡へ逃げ出す者もいた。

あまりの恐ろしさに魂を冷やし茫然としてうろつく者、また家族を呼び合う者など、言葉にも絵にも描けないありさまであった。このように狼狽する人々があるのも当然で、空一面を覆う雲のようなものが崩れ落ちる時は、人々はひとたまりもなく死ぬであろうし、まさにこの地の天地は崩れてしまうであろうと悲しく思うと、未曾有の噴火現象にうろたえる姿を伝えている。

富士山噴火絵図 夜乃景氣

宝永火口から火柱が噴きあがっている。この噴火により大量の焼けた石や砂が降下し、御厨地方をはじめ、広い範囲に大きな被害を与えた。



「夜乃景氣」

絵図に書かれている文字

(夜乃景氣)

燒初十一月廿三日より

十二月八日ノ夜迄

毎夜に如此見候

但シ廿三日燒初之夜

別而大きに当所人家之戸

はめをならす

同ク明ケ七ツ時ニ当宿へ燒灰

降事、唯壹朝ナリ

(上部) 每夜稻光りの「とく
伊豆あまき山遍迄光り渡る
事、此如

富士山噴火絵図 焼納り乃景氣

11月23日に始まった噴火は、12月9日まで16日間続いた。
焼け納まった後には宝永山が出現した。



「焼納り乃景氣」

絵図に書かれている文字

(焼納り乃景氣)

右十六日之間燒ケ

十二月九日之朝 明ケ七ツ時分

此大キニ 壱ツ鳴ル

九日に者 山晴渡リ見る事如此

宝永山出来ル

富士山宝永噴火之絵図

(御殿場市 滝口文夫氏所蔵)

御殿場市山の尻に残されているこの絵図には、黒雲が丑寅(北東)に流れている様子が描かれている。この黒雲は火碎流を意味し、黒雲中の升形は雷紋といい、雷鳴のような音が轟く様を表している。



3 噴火後の被害状況

宝永4(1707)年12月9日 噴火終息 → 宝永山できる

被害状況

駿東郡須走村(小山町須走) 噴火にともなう焼け砂により全戸75棟中35棟が焼け、38棟が倒壊し砂に埋まる。積もった砂の深さ1丈(約3メートル)

御厨地方(小山・御殿場) 砂の堆積 3尺以上の村 → 58ヶ村の内、39ヶ村

◎ 資料 『小山町史』第2巻「宝永7年中日向村など58ヶ村御救嘆願書写」による被災地の状況

- ・御厨領39ヶ村に御切(お助け)米 を支給(1人1日1合)
- ・積もった砂の除去は被災地が行う(幕府は救済を行わない)
- ・野菜などの青物はまったく手に入らない状態
御切米の支給打ち切り → 多数の餓死者が出る寸前の状態に追い込まれる

・正徳2年用沢村等7ヶ村の状況

◎ 資料 『静岡県史』通史編3 近世1 858頁
表2-30 正徳2年 砂場7か村の村況のあらまし参照

◎「宝永七年 中日向村など
五十八ヶ村御救嘆願書写」

一 駿州砂本五拾八ヶ村小田原
御領分并大久保長門守様稻葉
紀伊守様御領分二而御座候処二
砂積以後伊奈半佐衛門様御支
配二罷成候二付、砂厚薄御吟味
之上、五拾八ヶ村之内三拾九村
は三尺以上深砂二罷成
去ル子三月ヨリ丑二月迄、大
小人別壹人二付一日壹合宛之
御扶持米被下置、二尺九寸以下
拾九ヶ村は浅砂二罷成

正徳2年 砂場7ヶ村の村況のあらまし

村名	村高	砂深さ	総戸数	留村戸	他出戸	人数	留村者	他出者	馬数	売払馬	残った馬
用沢村	330石809	4.5尺	74棟	44棟	30棟	429人	153人	276人	104頭	91頭	13頭
棚頭村	78.45	4.4	25	13	12	155	75	80	40	33	7
阿多野新田	36.841		13	9	4	118	65	53	20	18	2
大御神村	110.602	5	39	20	19	241	111	130	62	56	6
上野村	145.973	4.3	46	34	12	250	161	89	65	55	10
上野新田村	10.993	4.1	5	3	2	33	22	11	9	9	0
中日向村	116.421	4.5	22	14	8	198	50	148	50	47	3
計			224棟	137棟	87棟	1424人	637人	787人	350頭	309頭	41頭

正徳2年 砂場7ヶ村の村況のあらまし
(用沢村・棚頭村・阿多野新田・大御神村・上野村・上野新田村・中日向村)

・7ヶ村の戸数の合計	224棟
引き続き村に留まる家数	137棟
他に移った家数	87棟(全体の39パーセント)
・7ヶ村に住む人数の合計	1424人
引き続き村に留まる人数	637人
他に移った人数	783人(全体の55パーセント)
・7ヶ村に飼育されていた馬の数	350頭
売られた馬の数	309頭(全体の88パーセント)

村落社会解体の危機が迫る状況…飢餓との戦い

4 復興への道程(1)

復興担当者 関東郡代 伊奈半左衛門忠順 酒匂河畔に役所開設

堆積した砂は、雨が降ると川へ流れる →
砂が川底に溜まり、上流の鮎沢川、下流の酒匂川が氾濫する
→ 足柄平野一帯に大きな被害をもたらす

対策：1 川底に溜まった砂さらい 2 堤防の強化

宝永6(1709)年 5月～6月 伊奈半左衛門と勘定奉行所役人が御厨地方(小山・御殿場)を視察後、本格的な復興が始まる
・「相州川筋御普請」による御厨地方農民の積極的使用
・砂除金の支給開始
・毎月御助米や家作料を被害に応じて下付する

がらせはし

江戸時代の岩流瀬(がらぜ)土手にかかる橋。かながわの橋百選。
上流の鮎沢川が酒匂川となり、宝永5(1708)年6月22日の台風により土手が決壊し、足柄平野に大きな被害を出した。



酒匂川下流

足柄下郡大口土手付近。宝永5(1708)年6月22日台風により決壊。
その後治水工事が行われ、8代将軍吉宗のころによく完成した。



4 復興への道程(2)

御厨地方の稻田に耕作ができるようになるまでに20～30年の歳月を経る畠の場合、天明2(1782)年頃までかかり、噴火から実に70年以上を経過

◎復興を可能にしたもの

- 1 農村の村役人が中心となって、自ら考え、自ら体を動かし、自ら幕府と交渉したこと。
- 2 被災地に留まった農民たちに、復興への意欲と執念があった。
(住民の郷土愛と、復興をあきらめない継続した行動力・結束力)

伊奈半左衛門 正徳2(1712)年病没

「窮民救済のための処置(駿府紺屋町の米蔵から御助け米を支給)により罷免され、責任をとって切腹させられた」という噂が巷で流れる。

農民たちは伊奈半左衛門の慈愛と功績を称え、伊奈神社を建立した。現在でも、毎年4月29日、11月3日は御厨地方の氏子による大祭が挙行されている。

伊奈半左衛門忠順公像 小山町 伊奈神社



平成24年4月29日(日) 伊奈神社大祭



5 安政の東海地震

- ・1854年12月23日(嘉永7年11月4日)午前9時頃、御前崎沖を震源とするM8.4の巨大地震発生。
- ・静岡県下平地部のほぼ全域が震度6前後、三島・駿府・掛川などの都市は大火。山地では安倍川流域をはじめ、各地で山崩れが起こる。
- ・地震から1時間ほど後の大津波は、土佐湾から房総半島にまで広範な被害をもたらし、静岡県域でも特に大きな被害を出した。
- ・翌日には紀伊などが大地震に襲われ、翌年10月にもまた江戸に大地震があって安政大地震と呼ばれる。
- ・安政東海地震は東海道の交通を麻痺させ、全国に衝撃を与えた災害であった。静岡県域の住民にとっては、地震・津波などの災害と並行して、コレラの流行が生み出す恐怖とともに、世の終末を感じさせ、幕末の世相に大きな影響を及ぼすことになった。

安政見聞録

(防災専門図書館所蔵)

嘉永7年の安政東海地震のあった翌安政2年10月2日には江戸で直下型の大地震が起き、大きな被害をもたらした。倒壊した家屋は35万棟以上といわれる。



地震之記・山崎継述 田地変じて湖水となる図
(沼津市明治史料館所蔵)



安政見聞誌 (防災専門図書館所蔵)

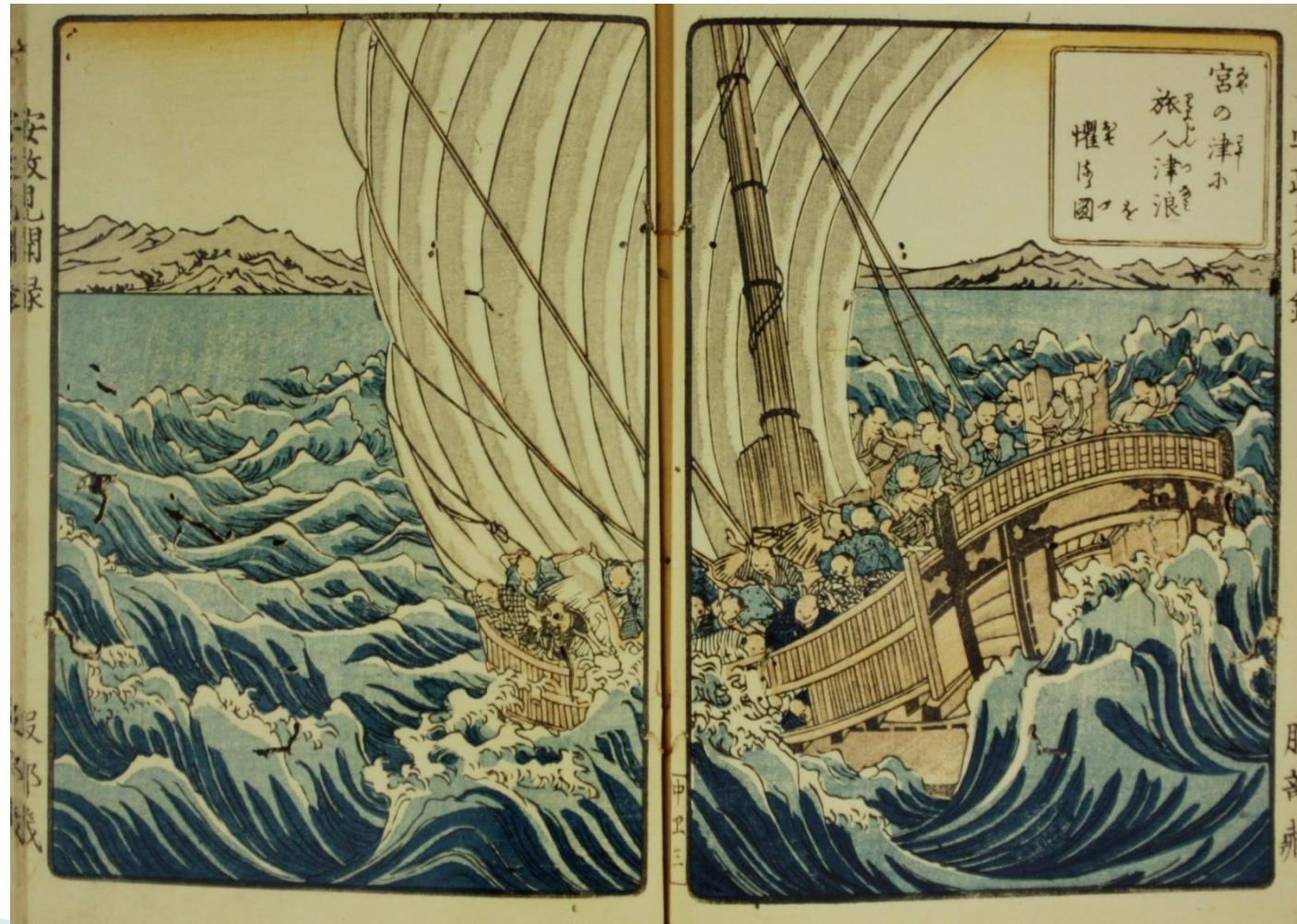
安政2年に江戸で起こった安政大地震でも
火災による被害は大きかった。



安政見聞録

宮の津に 旅人津波を懼はる図

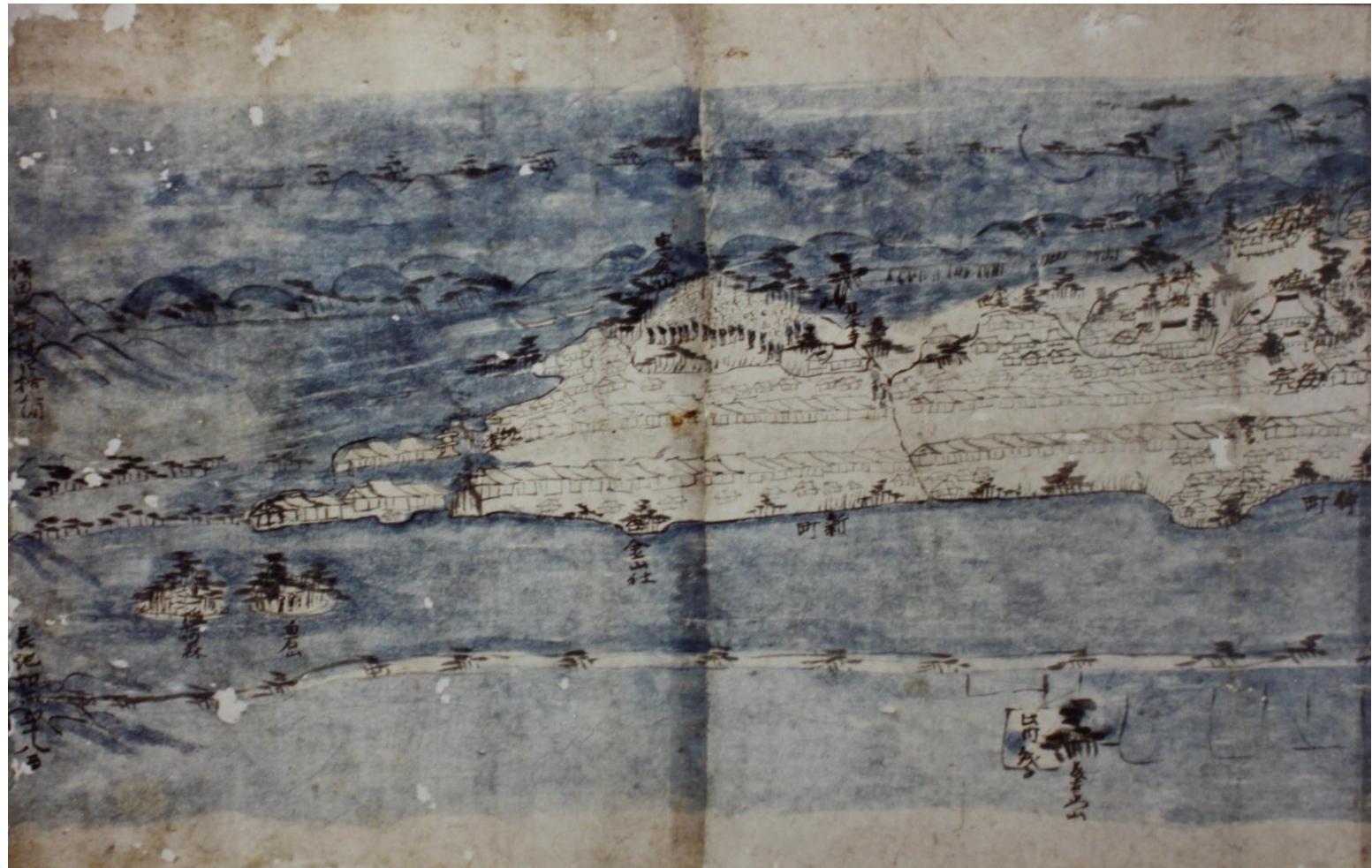
(防災専門図書館所蔵)



舞阪宿津波被災図

(浜松市博物館所蔵)

上が南で遠州灘。その海水が宿場町の東西から町の背後に及び、やや高地の宿の主部は島状になった。右下には500石積の船が打ち上げられ、左の宝塔山中央の氏神社には多くの人が避難している。当時の住民による図である。



『ディアナ号がやってきた！日本人とロシア人に生まれた心の絆』（中村勝芳氏編著）

安政大地震で船体に被害を負ったロシア船ディアナ号を救う富士市の漁民。

当時の日本人とロシア人の友好の記録が、この一冊に収められている。



◎研究の手引き(参考資料)

- ▶ 『静岡県史』 通史編3 近世一 (824頁～882頁)
(1251頁～1291頁)
- ▶ 『静岡県史 別編2 自然災害誌』
- ▶ 『静岡県史 別編3 図説静岡県史』
- ▶ 『富士本宮浅間社記』
- ▶ 『小山町史』 第2巻
- ▶ 『富士山宝永噴火絵図』 沼津市・個人
- ▶ 『富士山宝永噴火之絵図』 御殿場市・滝口文夫
- ▶ 『浜名湖北岸を襲った津波の図』 浜松市・内山家
- ▶ 『安政見聞録』 防災専門図書館 81057 近世写真集19
- ▶ 『安政見聞誌』 防災専門図書館 81057 近世写真集19
- ▶ 『地震之記』 沼津市明治史料館
- ▶ 『ディアナ号がやってきた！日本人とロシア人に生まれた心の絆』 中村勝芳 編著
- ▶ 『舞坂宿津波被災図』 浜松市博物館